

聖書：マタイ 28：16～20

説教題：天においても、地においても

日時：2013年2月3日

教会設立 54 周年記念礼拝として、マタイの福音書最後のいわゆる主の「大宣教命令」の箇所を開かせて頂きました。すでに皆さんが良くご存知の箇所ですが、教会に与えられている宣教の使命について改めて心に留めさせられたいと願っています。まずこの命令は、どんな人たちに語られたのでしょうか。16 節に「しかし、11 人の弟子たちは」とあります。なぜ 11 人か。それは 12 弟子の一人、イスカリオテのユダがイエス様を裏切り、脱落して行ったからです。3 年間、イエス様から真実な愛と導きを受けつつも、銀貨 30 枚で主を売り飛ばし、あげくの果てには自らの行動を悔やんで、自分の命を絶ちました。その結果、主に選ばれた輝かしい 12 弟子が 11 人になっていた。これは不名誉な話です。また他の弟子たちもイエス様が捕らえられた時、イエス様を見捨てて逃げてしまいました。12 弟子の筆頭者ペテロも、イエス様なんかとは関係がないと 3 度も公に誓い、主を裏切りました。主の前に立っている 11 人は、そういう人たちです。今やその組織もボロボロに崩れ、見るも無残な状態になっていた人たちです。それに加えて、イエス様にお会いした時、彼らの中には「疑った者も」いました。マタイはそのことを正直に書き記しています。なぜ彼は、この事実を書いたのでしょうか。それはこの大宣教命令という途方もない大命令を主が授けたのは、信仰的になお多くの欠点を持つ者たちに対してであったことを、彼が驚きをもって受け止めたからではないのでしょうか。このことを思い巡らす時、私たちは同じく弱く、力のない今日の私たちにも、主はこの命令を語っておられることが分かるのです。以下、主の言葉を三つの点から見て行きたいと思います。

まず第一に見たいのは、主の偉大な主張です。18 節：「イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。『わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。』」ここに示されていることは、イエス様は今や以前とは全く異なる状態にあられるということです。イエス様は神としてなら、永遠の昔から天地一切の主権を持っています。しかしここでは私たちの救いのために人となり、十字架と復活のみわざを成し遂げた仲保者としての主権のことが語られています。このイエス様がこの主権を持つ前は、この世界は罪とサタンと死が支配していました。しかしイエス様は私たちの罪を背負って死んでくださり、よみがえってくださったことによって、私たちの罪を全部清算し、死の力も粉碎して、その上にあったサタンの支配をも打ち壊してくださいました。そして父なる神は、このイエス様を天地一切の主権者として高く上げられたのです。ピリピ 2 章 6～9 節：「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。」 エペソ書 1 章 20～21 節：「神は、その全能の力をキリストのうちに働か

せて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。」 今やこの天地は、罪や死やサタンではなく、私たちのために死んでよみがえられたイエス様の手に握られているのです。この世界はキリストの御国となったのです。恵み深い王が天地を治める王座に着いたのです。これこそ大宣教命令の基礎となる重要な恵みの事実です。

第二に見たいのは偉大な命令についてです。19節～20節前半：「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。」 この大宣教命令の中心となる動詞は「弟子とせよ」という部分です。このことから、この箇所は宣教命令ではなく、「弟子化命令」だと言う人もいます。しかし間違っていないのは、イエス様はここで弟子たちに、人々を「自分の弟子とせよ」と言っているのではないということです。これは「イエス様の弟子とせよ」という意味でしょう。イエス様はマタイの福音書 11章で「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。」と言って、ご自分に学ぶ弟子になりなさい、とすべての人を招かれました。そのイエス様に救いを見出し、そのイエス様にいつも喜びを持ってつき従い、イエス様から学び続ける人。そのようなキリストの弟子となるように人々を導くのです。

そしてここには今の主動詞を支える三つの分詞があります。その一つは「行って」。これはこれまでイエス様の宣教活動はイスラエルに限定されていたのに対し、今や全世界に福音を宣べ伝える時機が到来したことと関係します。そういう意味で弟子たちはイスラエルにとどまらず、あらゆる国の人々を弟子とするために、今までの領域から出て行かなければならない。これは今日の私たちにどう適用されることでしょうか。これは今、申し上げた状況を理解するなら、単純にみなが遠くに出かけて行かなければならないという意味でないことが分かります。しかしこれは今や恵み深い王が支配くださっているというグッド・ニュースを人々に伝えるために、私たちがイニシアティブを取って活動しなければならないということを意味します。そのために、行ってそのことをしなさい、と主は言われるのです。これは私たちの隣人に伝えることにおいても、あるいは同じ家に住む家族に伝えることにおいても適用できるでしょう。イエス様はそのために、あなたが行きなさい、と言われるのです。

二つ目の分詞は、「バプテスマを授けなさい」。イエス様はわたしを救い主として心で信じれば、洗礼を受けるか受けないかは重要でないとは言っていません。この大宣教命令の中はつきりと「洗礼を授けなさい」とあります。心で信じている人は、口に出して公に告白し、洗礼

を受けるのです。その洗礼について「父、子、聖霊の御名によって」とあります。これは原文では「父、子、聖霊の御名の中へ」という表現です。そして「御名」という言葉は単数形になっています。つまり三位一体の神との一つ交わりへ入れられるのが、洗礼が現わす恵みです。信仰を告白し、洗礼を受けることを通して、私たちは父、子、聖霊の三位一体の神様と結びつけられ、その豊かな交わりの中に生かされるのです。

そしてもう一つの分詞は、20節の「教えなさい」。洗礼はゴールではなく、信仰生活のスタートです。そこからイエス様の言葉を守り行なう生活へ進むことが大事です。特に「わたしが命じておいたすべてのことを守るように」とあります。自分の好きなどころだけではなく、イエス様の言葉全部、あるいは聖書全体を学び、それを守り行なう必要があります。イエス様の御言葉はすべてのいのちの御言葉であり、それを守る生活に進むことこそ、私たちに祝福をもたらします。そこにおいて私たちは本来の正しい人間の姿を回復し、またキリストの似姿に変えられて行くのです。

果たしてこのようなあらゆる国の人々を弟子とするという働きは、この時のボロボロの弟子たち、そして今日の私たちに担えるものなのでしょうか。第三に見たいのは、この命令に付けられている偉大な約束についてです。20節後半：「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」 ついつい自分ばかりを見て、できない！不可能だ！無理だ！と委縮しやすい私たちに、イエス様は「見よ！わたしがあなたがたとともにいる」と言っておられます。原文では「わたし」という言葉がはっきり強調されています。すなわち他の誰でもない、このわたしがあなたがたとともにいるのだ、と。私たちは一人ぼっちで、この大宣教命令に従うのではないのです。これは天地の主であるイエス様との共なる働きです。いやむしろ聖書から分かることは、この宣教の働きは何よりも神の働きであるということです。神が宣教の主であり、イエス様を遣わし、この働きを進めておられます。そしてイエス様が復活後も継続してこの働きを成し遂げて行かれるそのプロセスにおいて、私たちをもこの神の事業に参加させ、用いて下さるのです。

またイエス様は「いつも」ともにいます、と言っています。「いつも」とは「一つ一つの日すべてに」ということです。すなわち主が私たちと共におられない日は一日もないということです。きょう私が主の大宣教命令に従うことにおいても、明日この大命令に従うことにおいても、例外なく主が伴ってくださる。今日は都合が悪いからお休みという日はない。これは私たちが誰かを覚えて伝道する時、誰かに関わろうとする時、大きな励ましとなる真理でしょう。

また「世の終わりまで」とあります。これはこの世界の歴史には明確な目標があることを示しています。今の時は無目的にダラダラ流れているのではない。やがて今の時代が終わりとなる日が来ます。神の救いが最終的な形で現れ、神の栄光がこの上なく明らかにされる日が来ま

す。その日を見つめ、その日に至るまで、主と共に働くようにと教会は招かれています。そして主と共にその日を来たらせた者たちとして、喜びをもって栄光の御国に入るようにと招かれています。

このイエス様の約束に導かれて、杉並教会も 54 年間、大宣教命令に従う教会として主が用いてくださいました。一人一人がキリストの弟子となり、さらに人々をキリストの弟子とするために、あなたが行きなさい！との御言葉に促されて、教会の色々な活動や奉仕を通して、またそれぞれが遣わされる場で、この使命の遂行を主が導いてくださいました。またその中から多くの直接献身者や、海外で働く宣教師方をも生みだしてくださいました。主がそのようにこの教会を導き、ご自身の約束の真実さを示してくださったことを振り返って、私たちはただただ御名を賛美するものです。しかし同時に今日、私たちが心に留めたいことは、イエス様がここで「世の終わりまで」と言っていることです。神の計画はまだ完成には至ってはいません。ゴールはなお先にあります。神が素晴らしい約束の御国を実現されるのはこれからです。その日に向かって、主はなお教会を招き、用いてくださるのです。私たちは自分の勝手な判断で、もうこの辺で、と手を緩めてはならない。「世の終わりまでともにいる」との主の御言葉を新たに心に留めて、この務めに邁進する教会でありたく思います。

私たちと共におられるのは、天においても地においても、一切の権威を持っているお方です。その主があらゆる国の多くの人々が、ご自身の恵みに生きることをなお熱烈に望んでおられる。そのために、「あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい」と今日も私たちを招いてくださっている。私たちはこの主の御心とビジョンを受け止め、私たちが頂いた救いがさらに多くの他の人々にもたらされるように、そして神の御名がほめたたえられるようにと祈りつつ、御国の完成の日を見つめて、主と共に働き、用いていただく主の教会の特権と喜びに生かされて行きたいと思います。